

# 和歌山県「企業の森」事業 企業説明会



■日時 平成19年10月15日(月)  
13:30~15:30

■場所 (社)関西経済連合会大会議室

## ■プログラム

13:30~14:10

和歌山県「企業の森」について

和歌山県知事 仁坂吉伸

14:10~14:40

「企業の森」を歓迎します

田辺市長 真砂充敏

14:40~15:10

「企業の森」に参画して

松下電工(株)CSR・社会貢献室長 吉川喜代次

15:10~15:30

質疑応答

## ■仁坂知事

紹介をいただきました仁坂でございます。

本日は格も大勢の関西を代表される企業の方々にお集まり頂きまして、和歌山県を代表して心から感謝申し上げます。

それから、こういう催しをするということについてご協力をいただきました関経連の皆様には、本当に心からお礼を申し上げたいと思います。今日は40分、時間をいただきましたけども、20分くらいで終わりました、皆様から何かご質問があったり感想を問われたり、いろんなことを言われるような気がしますので、少し時間を空けておいて状況をみながらやらせていただきたいと思います。

和歌山県のこの「企業の森」のすすめというパンフレットをもとにして、或いは同じものがここに出ますが、それをもってこれからご説明をさせていただきます。この「すすめ」というところに、われわれの万感の思いが込められておりまして、どうぞ皆様よろしくお願い申し上げます。

まず、和歌山県は県土の77%ぐらい、約36万haが森林であります。もともと木の国でありまして、温暖多雨な気候条件、それから昔から特に常緑広葉樹を中心とするような多種多様な木々が和歌山の森に埋まっております。全国でも有数の蓄積量が昔もそうだし、今でもそうだと思います。例えばヒノキをとりますと、和歌山県のヒノキの蓄積量は日本一であります。スギもそうかなと思ったら、スギは他の県もたくさんあるらしく、実は僅差ですが15位であります。

和歌山県の77%が森林であると申し上げましたが、和歌山県は昔から林業が盛んなところで、逆に言うと、ほとんどが民有林で、そのうちの人工林が61%、天然林が38%ぐらいであります。6：4で人工林が多くなっている。これはどういうことでそうなったかと言いますと、特に戦後、かなりの勢いで林業が盛んになって、逆に言うと、今までの天然林も含めてどんどんと伐採をして、当時は林業に力があつたものですから、新しい資源もまた造ろうということで、ほとんど全部とっていいくらい、きちんと植林をしました。従って、和歌山の山は、何も無いところは殆どないといってもいいと思います。

関西空港に東京の方から飛んでくると、和歌山の山の上をグルッと回ってきます。その時に下を見ると、非常に緑豊かな山々がずーっと繋がっていて、これなんと言ふことかというくらいの状況であります。

ところが、中に入ると、実は非常に暗い林でスギ、ヒノキの純林みたいになっていて、しかも間伐が進んでいないので、それがなかなか大きくなり、ひょろひょろひょろっとして栄養失調みたいな木がいっぱい密に生えているというのが和歌山県の、すべてではありませんが、一つの問題として指摘される場所であります。

じゃあどうしてそういうことになったかということですが、林業が大変厳しい現状にある。一つは木材価格がどんどん低下しました。安い輸入材が入ってきました。それから社会構造が変化して、従来みたいに、無垢の木を使わなければ家が建たないということでもなくなってしまった。

それからどっちが原因がわかりませんが、山村が過疎化し、高齢化して、従来のように力のある山林従事者が減ってきた。それで今言いましたような荒廃森林が増大して、一見、外から見ると立派な林に見えるけれども、中に行くと成長の悪い林があって、これだとずーっと置いておいてもなかなか売れない。本当は長く置いておけば太って、ある時期になったら、また切って、また次植えてというような循環ができるのであればいいが、価格が安いということと、今言ったように、なかなか人手なんかもうまくいなくて、それが手入れが出来ない状態で放ったらかかされているということになる訳であります。

これを何とかしなきゃいかんということで考えたのが、我々の森林・林業行政な訳であります。和歌山県の森林について、ここに出ておりますような形になっているということを今申し上げたところですが、この残っているスギ、ヒノキはどういうものかと言うと、所謂「紀州材」と言われまして、割合、自分で言うのも変ですが、全国的には評価の高い木であります。昔林業が盛んであった時に、もちろん関西もそうですけれども、丸太で引いて、東京の市場なんかでもどんどん売れて、紀州材の床柱とか、そういうものは割合有名でした。緻密な構造になっていて強度が高いというのが紀州材の特色でした。従ってそれを今でも大事にしながら、衰えたりといえども、頑張っている林業家とか製材所もある訳です。

ところが、そういうところだけ、我々として頑張っているんだけど、

それはさき言いましたひょろひょろとした木々をきちんと手入れをして次の時代に林業資源を確保するということまでなかなか行かない。じゃあどうしたらいいかということ、やることは二つしかありません。

一つは、低コスト林業を我が和歌山県で何とか定着させると。従来は、林業の大変な保護をしている訳ですけども。保護と言いますと、大きな林道をどかんと造るとかかなり派手なことをやっていました。ところがその林道がついても、そのそばで、必ずしも林業家が間伐材を切るというようなところまで行っていない。そうするとどうしたらいいかというと、そんなどーんとした林道なんて別にいらないのだから、作業道みたいなものを造ったり、或いは若干お年寄りでも、ちゃんと木々を運び出せるような、それをしかも低コストでできるような生産体系を作りあげて、それを残った林業家に普及させて、何とか低コストで下まで運べるというようなことをやっいてこうじゃないかと、特に間伐材も含めてそういうことができるようにやっいてこうじゃないかと。そういうことが一つの目標です。

もうひとつは、間伐材というところに着目して言うと、木材需要が間伐材のところではなかなか発生しない。例えば、山から運び出すには、ある程度コストがかかります。そのコストがかかった時に、勿論切るときもコストがかかります。切って運び出すというコストを間伐材ではなかなか吸収できません。例えば、チップにして卸そうとしても、チップにする工場まで持ってくるのが逆有償みたいな形でないとならぬ。ということになると、なかなか馬鹿馬鹿しくて林業家も体力がありませんから、それができない。できないとなかなか木が太らないという悪循環になっている訳です。

従って例えば集成材、和歌山がかつて我々には誇りがありますから、床柱でがんばろうと思っておったんだけど、プレハブ住宅なんか見ると殆ど集成材の塊ですよ。その集成材を和歌山がちゃんとできるようにするというのも一つだし、或いはバイオマスの原料としてこれを利用して、例えば何とか電力を商業ベースに近いぐらいの形でとれないのかとか、或いはいろんな林産加工物を作って売れないかとか、ありとあらゆることを七転八倒してやっ取るというのが和歌山の現状であります。

ただ、残念ながら今我々が誇るようなところまで残念ながら行ってない。然らば、どうしようかということで、実は皆さんにお願い

いをして、この「企業の森」という事業で何とか助けただけでないかということをお願いしたくて今日まかり超した次第です。

森林のもつ機能、これはよく森林の多面的機能とか言われます。再生可能な資源である木材ですから、使ってしまったら終わり、石油のような形で、人類の歴史を考えると使ってしまったら終わりというものではないと。山に木が埋まっているということで、どれほど災害が防止されたり、或いは洪水が止まったりということがあるかというようなことも考えとかないといけない。

それから、山の緑というのは、大阪のような都会人を含め、我々の心の故郷であります。そうすると保養・レクレーションの場としてもう一度見直すべきなんだろうと思います。

それから生物の多様性の現場であるということだろうと思います。スギ、ヒノキの純林になってしまうと、なかなかそれが十分ではありませんが、そういう生物多様性の現場として森林は見直されるべきかもしれません。

最後に、地球環境問題に対する決め手の一つというものの森林というのがもう一度脚光を浴びていると思っています。二酸化炭素の吸収機能がある。それからそれが循環的な資源になって、いったん切ってももう一回空中に必ずしもそれが瞬時に出て行くわけではない。それが蓄積されてまたそれが出て行く前に、木の中に蓄積されるCO<sub>2</sub>ができていけば、地球にとってはプラスの方向への貯金ができる訳で、そういうことが是非見直されるべきではないかというふうに思います。

そういうような森を守り、それから和歌山県としてなかなか辛いというところを皆さんにお助けいただくために、「企業の森」というのをピンチヒッターというよりも、DH、指名打者としてお願いをしたいと我々は思っている次第であります。

4つぐらい私たちはセールスポイントを持っております。これは我々が考えたセールスポイントでありますので、皆さんにとっては負担になるようなものかもしれません。

しかし、敢えて申し上げたいと思います。

一つは、都会生活者の田舎暮らし体験。それから企業の環境貢献。つまりこれは名前が空想かもしれませんが、森林を保全するという意味で企業が何とか助けていただけませんか、それは環境を守るということに役立つのでありませんかということです。それから林業従事者の就労確保にはこれはものすごい機能しますので、是非将来の山を守ることも含めてお願いをしたいと思う訳です。それから地球環境という大きな視野で考えた時も、森林を増やすということ、森林の中にCO<sub>2</sub>を蓄積するという営みを皆様にやっていただくということでもありますので、是非お願いをしたいと、この4つの大きな目標があると考えています。

現在30の企業、或いは労働組合、或いは産業別の組合、こういう方々がこの「企業の森」活動に和歌山県で従事していただいているということでもあります。

どういうものかと言いますと、次のページに30社があります。どこでやっているかという、次のところでやっていただいております、和歌山県全域が正に候補地といってもいいと思っております。

それでどうやってやるかということですが、「企業の森」の仕組みというところに、企業、市町村、県の森林保全・管理協定と、これは私どもが入って、それから当該市町村の市長さん、町長さんと企業の方々が森林保全・管理協定というのを結んでもらいます。これは基本的にはこういう枠組みについて、今から申し上げます枠組みについて合意をするということでもあります。

それから、森林所有者と企業の土地無償貸付契約を結んでいただく。所有者は企業に対して土地は無償で提供します。「どうぞ」ということです。その代わりに、10年たった時、木が生えてきますが、俺のもんだといわないでそのまま所有者に返していただくということでもあります。もちろんそれは延長してもかまわないと思います。

それから、企業と森林組合の植栽森林保全委託契約ということなんですが、企業の方々はここに例えば土地を借りて、山の斜面になると思いますが、そこで企業の方が行ったりいろいろお植えになる。ところが企業の方はお忙しい。そんなに毎日そこで草刈りをできません。従って、地元の森林組合との間で、下草は当分刈ってくれよとか鹿の害は防いでちょうだい

ねとか、そういうことをいろいろ頼む訳です。大きくなってくると、あるところまで下枝は打っていただきねとか、今度企業の人が行くからそのためにある程度残しておいてねとか、そういうプロに管理をしてもらうということを契約で結びます。これは森林組合の人たちの雇用にもなる訳であります。

「企業の森」4つの意義を申し上げましたが、もう一度おさらいをさせていただきます。

第1の都市生活者の田舎暮らし体験であります。まずこれはレクリエーションになると思います。都会のこういう生活の中で一生懸命仕事をしておられる人が、山の中に行って、汗をかいて山の斜面を上がって、掘って、植えて、或いは下枝を打って、そういうことだけで、ちょっとしたレクリエーションになるのでないかな。

それからボランティア活動として最も好適な対象だと思います。

それからほんまもん体験とありますが、これは和歌山県がこういう田舎暮らしをして遊びませんかという一種の観光プロモーションをしています。これで、例えば植え付けのほんまもん体験とか、ほんまもんて昔テレビでありましたね。田舎暮らしをしている人たちの。NHKの朝のドラマのタイトルがほんまもんなんです。和歌山県はほんまもんというのが大好きなので、こういうことを使っているのですが、要するに田舎暮らし体験です。その観光で地元の人たちとプログラムを作って、それをいろんなところにまいて宣伝をしています。去年はこのほんまもん田舎暮らし体験観光で26万人の人たちが和歌山にお見えになりました。これはわざわざお金を払ってこのために来られる人がそれだけいるということなんです。従って、この「企業の森」では、このほんまもん体験の最もいいところが、別に新たに追加費用がなくてもできるということではないかと私たちは思っています。つまり都市の人たちが求めているということなんじゃないかなということでもあります。

それから、地元の人たちの交流。これもほんまもん体験の一つのメリットなんですけれども、後で松下電気さんからお話があると思いますけれども、地元の人でも大喜びで、一緒に遊ぼうとかお弁当を作って一緒に食べようとか、そのというような話が続々と出てきます。これもいい話ではないのかというふうに私たちは思っています。

それから企業の環境貢献で、荒廃森林の保全、左側の図はもともと熊野  
或いは紀伊山地にあった森林です。これそのものをこの活動によって戻せ  
るかというによくわかりませんが、いろんな木を植えます。針葉樹の純林  
にする訳ではありません。従ってこれに近いような森が復活していきだろ  
うと私たちは思っています。特に広葉樹等の植栽、保育による森林再生が  
できていけば、今まで純林であったスギ、ヒノキの林の、例えば一角にこ  
ういう広葉樹の林ができていって、それで全体として和歌山の紀伊山地の  
環境というのがだんだんと元に近づいていくんじゃないかなあと思っ  
ています。そのお手伝いを正に企業の方がしていただくということであり  
ます。

それから林業従事者の就業確保ですけれども、森林組合に森の管理を委  
託していただきます。実は、緑の雇用という事業があります。これは和歌  
山県が数年前に提唱して作られた事業です。そのとき、数年前というとき  
まだ日本が大不況でした。大阪でも働く場所がなくて困っているという人が  
沢山いた。そういう人たちに農林水産省の補助金で山の従事者として、つ  
まり緑の雇用の担い手として田舎に行って、林業従事者として一人前にな  
るための研修をやってみようじゃないかと。そのために結構巨額のお金を  
国からいただいて、和歌山県をはじめいろんなところでこの緑の雇用とい  
うのをやっています。和歌山県は2百数十名来ていただいて、家族まで含  
めると300人から一時500人ぐらいの多くの方が和歌山県に定着し  
てくれた。非常に高学歴な人とかいろんな人がいらっしやいます。若い人  
もいらっしやいます。

ところが、ただでさえ林業従事者の雇用が難しくなっている。そこへこ  
ういう方が来ていただいて、訓練期間中は国が補助金を出してくれる。県  
も出してますからいいんですが、この人たちを何とか山の中に定着できる  
ようにしてさしあげたいと私たちは本当に思っています。あれだけ志を高  
くして来てくれたのですが、残念ながらその時の政策の設計は、緑の雇用  
で訓練はするけれども、恒久的にこういう仕事でここに定着させるとい  
うところまで設計ができていない。これだと仕事なくなったら仕方ないか  
ら帰らないといけない。こんなことになったら、私はそのときいませんで  
したが、和歌山県としては本当に申し訳ないと思うわけであります。従っ  
て森林組合を通じて、そういう方々の仕事も作って差し上げて、それでそ  
の森林の管理をしてもらって、企業と一緒に生きてもらうということがで

きないものかと、そういうことを思っている次第なんでありませう。

それからCO<sub>2</sub> 吸収であります。これはもう皆さん一番関心の強い環境問題だと思っております。和歌山県では、「企業の森」に参加して下さった企業に対して100年分、このまま森を持ち続けていただくと、これだけ二酸化炭素を吸収して下さることになりますよという計算をして、ここに黄色い絵がありますが、これはヒノキの板であります。ヒノキの板に、あなたの「企業の森」から何トン吸収源として定着させてくれてますよという認定証を発行いたしまして、それで企業の方に差し上げています。

まだまだ地球環境問題が、例えばキャップ付きの規制が入るということが良いか悪いかなんて議論しているわけですから、これがそのまま取引の材料になるかどうかわかりませう。けども、少なくともCDMとか或いは先進国同士のCO<sub>2</sub>の取引とか、そういうことと殆ど同じような意味は我々として持たせることはできるだろうというふうに思っております。従って、この企業の活動から、あなたはCO<sub>2</sub>を何トン定着させてくれたんですということを、和歌山県は一定の方式によって公正に計算をして交付するということにしています。27企業、これは最近3団体増えたものですから、その前の27企業ですが、41,800CO<sub>2</sub>トン吸収量を達成してくれているということが分かっております。

次のページは「企業の森」の候補地であります。候補地は何もこれだけに限りませう。もっと幾らでもあります。県内どこでもできます。しかし、今のところ森林組合などと相談をして、ここどうですかと我々として一種のお店に並べているところがこういうふういろいろあります。いやいやあそこじゃなくて、その隣のもっと広大なところということであれば幾らでも相談に乗らせていただきます。そういうところがこれだけありますのでご検討くださいということであります。

なお、先ほどの地域の近くにじゃあ何があるのかと。例えば企業の人たちが一種のボランティア活動として大阪からバスで来ていただいて、植えるだけだと汗もかくよなあと。温泉はいっぱいあります。それから最後にちょっとお参りをしてということであれば、世界遺産・熊野高野のここは里であります。ちょっと最後に歩いて帰ろうかというようなこともまた可能であります。和歌山市にちょっと寄っていただければ、天下の名城、残念ながらコンクリート造りではあります、姿、形は昔のままの和歌山城

があります。それからテーマパークのマリーナシティ、大阪の方が沢山お見えになるのですが、そういうところもあります。それから例えば、名刺とかきれいな海岸線とかたくさん温泉。日本三美人の湯・龍神温泉、これは松下電工さんの「ながきの森」に近いのですが、そういうものもあります。美人になるかどうかは現地に行って判断をしていただきたいと思います。

それからパンダ8頭。中国を除くとパンダというのは世界に30頭いるのですが、8頭が白浜にいます。もうすぐ2頭返しますので6頭になります。8頭のうち6頭は和歌山県で生まれたのであります。中国とブリーディングの協定を結んで繁殖に貢献をしている。その結果8頭いるとこういうことなんでありまして、これもまだ子どもがおりまして、十分大きくなっていない。それがコロコロお母さんの周りで転がっていてとってもかわいい。こういうのも観て帰るとということも、子どもさんなんかお連れになっで行かれた時は可能であるということでありまして。

我々はCSRの情報誌も作りまして。その中は、8割9割がた「企業の森」の関係で満たされております。

「企業の森」につきまして、もし何らかの意味でご関心がお有りであれば、是非お申し込みだけじゃなくでご紹介も含めて、森林整備課の管理指導班にご連絡をいただければ、直ちに担当者がすっ飛んで参りまして皆様にPRをさせていただきたいと思っております。

どうぞそういう「企業の森」に、これは我々としてお願いをしたい。だけど別に無理矢理良からぬ寄付をしてくださいというようなことをお願いをしている訳ではないと信じております。

そういう「企業の森」にご参加いただいて、企業の方も良いように、我々も良いように、そして自然と地球が良いようになるように是非ご協力をさせていただきたいと思っております。

## ■真砂市長

ご紹介をいただきました田辺市長の真砂と申します。暫くの間よろしくお願ひしたいと思ひます。今日はこのような機会を設けて頂きました関係の皆さんにまずお礼をもう上げたいと思ひます。

今、仁坂知事さんの方から、「企業の森」の概要、和歌山県の受入体制詳しくご説明がございました。

私の方からは、少しローカルになるかも知れませんが、田辺市を中心にしながら和歌山県の「企業の森」の所謂PRも含めてお話をさせていただきたいと思います。

まず田辺市のご紹介なんですが、田辺市といいましても、よく市名を申し上げましても、紀南には梅で有名なみなべ町と温泉で有名な白浜町に挟まれて、田辺というのはあんまり特徴のない町と違うんかと、こういうふうに思われがちなのですが、大変な特徴がございます。そのようなことを少し申し上げたいのですが、実は田辺市は、平成の大合併ということで平成17年の5月に新市としてスタートしました。実に皆さんご承知でしょうか。周辺の大塔村、それから龍神村、中辺路町、本宮町それと田辺市と5市町村で合併しましたので、実に面積が1,026平方キロございます。これは大きな特徴です。1,026平方キロというのはどれぐらいかと申しましたら、例えば大阪と比較しますと、羽曳野市というのがございます。これ田辺市と災害の応援協定を結んでいるのですが、羽曳野市さんの面積が26平方キロというふうにお伺いしております。うちは1,026平方キロですから、如何に大きいかというのが実感されると思うのですが、因みに大阪府の面積が1,893平方キロということで、そこに田辺市をあてはめると、実に大阪府の54%が田辺市になってしまうと、これぐらい大きな町でございます。

そして、特徴がもう一つあるのは、源流を多く抱えている。所謂川が5つ流れているんです。北から言いますと日高川、会津川、富田川、日置川、熊野川ということで、紀南を代表する川が5つも流れているというそういう特徴もございます。そのうち、熊野川を除くと4つの川の源流があります。源流があるということはまた森林とも関係してくるんですが、今言いました大きな面積の9割が森林です。1,026平方キロのうちの90%が山です。そういうことで旧田辺市は大きな町なんですが、周辺の山村が一緒になりましたから、そういう意味では森林都市という言い方でも過言ではないかなとこのように思っています、「企業の森」につきましても、県下で30の企業の方が進出頂いていますが、田辺市に実に12の企業の皆さんがお越しいただいているという状況でございます。

そういう中で、我々は地元としてお出でになる企業の皆さん方のこの「企業の森」活動にサポートをさせてもらっています。

うちの町は、森林組合が4つございます。その4つの森林組合それぞれ

が大変元気で、山村で厳しい林業経営をしながら「企業の森」のサポートは熱心にしてくれる森林組合ばかりです。そういうことで、森林組合4つあげて大変歓迎をしております。

それから、地元の住民の皆さんも企業の皆さんとの交流、そういうことを大変楽しみに

しております。幾つか例がありますが、植林の後に、例えば河原でバーベキューをしていただいたりと皆さん方と地元の住民の皆さんとの交流。こういうことも地元は大変歓迎を申し上げているところでございます。

そういうことで、是非とも、皆さん方には、そういう意味では、企業の社会的な貢献の一環として「企業の森」の進出をお願いも申し上げたいなあとこのように思うんですが、しかしながら、お願いをして来て下さい、来て下さいということだけではなかなかそうはいかないということもでございます。今知事さんの方から「企業の森」の意義というお話が4点にわたってございました。そういうことで、企業側からすれば、別に和歌山県所謂田辺市に行かなくても全国には山がたくさんございます。どこの山に木を植えるのも、木を植えたことに変わりはないのですが、少し私は別の観点からその特徴なりその意義なりということを少しご紹介を申し上げたいなとこのように思っています。

まず一点は、大変近くなっているということも改めてご説明申し上げたいと思います。

どうも紀伊半島の南部というのは遠いという、そして道路事情が余りよくないという印象が強いのですが、実はこの11月11日に、田辺インターチェンジ、所謂紀伊田辺まで高速道路が南伸びます。そういうことで京阪神から田辺市まではかなり時間短縮になってきます。ただ今皆さん紀南の方に行かれた方も多いかと思うのですが、そうは言えども、帰り道に吉備のトンネルで大変渋滞するよと、これがネックでなかなか南の方には行きたくない、というお声もあるんですが、このことも今精力的に国の方にみお願いをして、県の方も借りて、そのトンネル、長いインターチェンジの手前のトンネルの改修が進められています。もう少しすればそういう渋滞改修も含めてこの京阪神から紀南が比較的近いということですよ。

それともう一つは、関東とはここは関係がないかもしれませんが、でも会社の関係があるかもわかりません。南紀白浜空港という空港がございます。

す。そういうことで関東エリア、所謂羽田から1時間で白浜空港まで行けますから、これもまたそういう意味では、都心からも比較的思った以上に紀南の地域というのはそんなに遠くないと、こういうことをひとつPRしておきたいと思うんです。

それともう一点ですが、先ほどのお話にもありましたが、少し掘り下げてご紹介を申し上げたいのは、やはり世界遺産の登録地である。これはやっぱり他の地にはない一つの特徴ではないのかなあとこういうふうに思っております。そうは言えども、世界遺産というのは日本に幾つでもある訳ですから、まあ別に和歌山県だけが特徴づいているんじゃないかなあと、このように思われると思うんですけれども、しかし、この和歌山県の「紀伊山地の霊場と参詣道」ということで、パンフレットも幾つか今日は皆さん方のお手元に配布をさせていただいているのですが、この世界遺産には大きな特徴が2〜3点ございます。それが企業の所謂社会貢献と相俟っていくようなところがあるのではないのかなあとこのように思っているんです。

確かにそういう森林的なものが自然遺産として登録されているのは、例えば白神山地とか南に行けば屋久島、先だっては北海道の井知床ということで、そういうような意味のところがございますけれども、この「紀伊山地の霊場と参詣道」というのには、大きな特徴がございます。そのことを申し上げたいのですが、実はまず一点目なんですけれども、世界には世界遺産というのが800余りあると記憶しているのですが、その中で道が世界遺産に登録されているというのは、僅か2例しかございません。その2例の一つが熊野古道な訳なんです。もう一つはスペインのサンティアゴの道。これは巡礼道なんですけど、確かに宗教は少し違いますが、そして所謂洋の東西は違いますが、同じような年代の時に同じように発展をして、同じく祈りの道として栄えたというそういう特徴を持っております。これは800余りある世界遺産の中でも僅か2つしかないという大きな大きな特徴がある訳なんです。

もう一つは、これもまた世界に類のないところなんですけど、実は大変広範囲に指定をされてございます。その中で紀伊山地の霊場というこういうことが文言にありますけれども、この霊場の核心の部分は3つあるんです。これは高野の真言密教と大峰の山岳修験道とそれと熊野神仏集合という3つの所謂宗教がある訳なんですけれども、これが実は紀伊半島という、

こういう世界的に言えば小さな半島の中にそれぞれ影響し合いながら、しかも独立して今なおこうやって続いているというのは、世界に類のないところなんです。ある意味大げさな話になるかもしれませんが、今後の世界平和というようなことを考えた時にこの熊野で皆さん方が社会貢献をされるという意味というのは大きいものがあるのではないかなあと。元々熊野というのは、森林そのものが所謂祈りの対象だった訳なんです。そういう意味では、ある意味、深い森林に神が宿っていたと、そこへ中国から仏教がやってくるわけなんです、何も対立せずそれを全部取り入れて、特に熊野は神仏集合というそういう表現なんです、神も仏も一緒に祀ってしまうと、こういう奥の深いと言いますか、懐の深い地域でございます。そうした大きな歴史やそういうものがございまして、そういう意味深さというものがあるのではないのかなあとこのように思っております。

もう一点はですね、このパンフレットにもあるのですが、世界遺産と書いて、紀伊山地の霊場と参詣道という資料があると思うんですが、これを見開いていただきましたら、右側に文化的景観というこういう表現がございます。皆さん、この文化的景観というのは、今800幾つ世界遺産があると申しましたが、大きく大別すると3つに分かれるんです。自然遺産と文化遺産と、そして自然と文化が複合した複合遺産とこうなる訳なんです。

この熊野古道を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」は実は文化遺産として登録されております。これが大変大きな意義がございまして、普通ですと、自然があって、滝があったり川があったり山があったりする訳ですが、自然があってそして文化がある訳ですから、従前ですとこれは複合遺産になると考えるのが普通なんです、これが文化遺産に登録された、要は自然も含め文化だと言うんです。紀伊山地というのは、ご存じだと思いますが、本当に植生が豊かで、ものすごく深い森だった。その森とともに共生してきたという歴史、所謂自然とともに共生してきた。そういうところが文化だという指定を受けたというのはこれは大変意義深い。私は3つの特徴とよく言うんですが、その中でも一番大きな特徴だというふうに申し上げているところです。そういう意味では所謂植林、山とともに暮らす。このことが文化として、そしてまたその景観が文化的景観として世界が認めた。ユネスコが認めたということですから、そういうところへ社会貢献の一環として植林をする意義、意味というものが大変大きなものがあるのではないのかなあとこういうPRの仕方を今日はさせていただいている訳な

んです。

大変世界遺産のPRみたいになって申し訳ないんですが、しかしながら、そういうやはり企業の皆さん方にとれば、何でそこへ植樹をするかという意味というのは大きな必要があると思いますから敢えて申し上げますが、そうしたいままでだったら複合的な遺産と思われたものが文化遺産として登録され、そしてその森林を保全をし、これからもこれを継承していくというこういう難しいところがあるんです。皆さん、世界遺産守っていくと簡単に言いますが、所謂モニュメントみたいなものであれば、凍結的に保存をしていったらいいわけなんですけれども、これは道とか景観とか山とか、これが世界遺産になっている訳ですから、地元の者だけでこれを守っていくかどうかと言いましたら、大変今山村はそういう意味では、人口減少、高齢化そういうようなことで、大変厳しい状況下でございます。どうか、企業の皆さんとともに、この文化的な景観を今後も守っていく、このことに一つのウェイトと言いますか、PR効果も含めて持っていたら、なお一層意味深いものになるのではないかなあ、このように思っているところでございます。

我々地元の者といたしましても、やはりこれからも森林とともに生きながら、そしてそれが文化として継承していきけるような努力をしていきたい。このように思っているんですけども、そういうお力添えを賜ったら誠に有り難いなあと思っています。

もう一点は、実は田辺市に三偉人という言い方で、三人の偉人を顕彰しています。その中の代表者が南方熊楠翁という、言わずもがな大博物学者。博物学者なのか植物学者なのか、そういう一つにとらまえることのできない森羅万象に大変大変造詣の深かった偉人がございます。

あと、植芝盛平翁。これは皆さんちょっとお馴染みではないかもしれませんが、合気道の開祖です。これも田辺市の出身でして、来年は合気道の国際合気道大会を田辺市でということをやっていますが。

それともう一つは、これは架空のところもございまして、これは胸を張って言えるどうかわかりませんが、武蔵坊弁慶が生まれたところと。

こういう三人の偉人ということをいっているのですが、特に南方熊楠翁なんですけど、この方は、エコロジーという言葉が最初に使った日本人だということで、この熊楠翁がフィールドにした、その場所はどこかと、これ

は熊野なんです。まさしく今の田辺市がかかえる森林地帯、これは熊楠が日頃から粘菌の採取ですとかいろんな植物の研究をしたそういうエリアなんです。そのころの恐らく熊野の森は植生が豊かで、本当に温暖多雨でいろんな植物が混成していたと思います。特に南の方の木の北限であったり、それから北の木の南限であったり、ものすごく混成をしていた。今生物の多様性という言葉がよく使われます。そういう意味では、そういう熊楠がフィールドにしたそういう森林地帯がいろんな意味で転換期を迎えています。先ほど、知事さんからもご説明がございました。その中で、やはり復元をして自然に帰していく部分ということも大事です。それと経済林として、林業として成り立たすことも大事です。このことをやはり総合してやっていくということも大事だということ、私どもとしてはこの熊楠翁の精神というのも一つのこれからの街づくりの柱だというふうに考えています。

また、旧の田辺市ではナショナルトラスト運動と言うんですが、これは天神崎という海岸なんです。ここに所謂企業進出があるということ在地元の住民が声を上げて、全国で初めてそこをみんなのお金で買い取ろうということで、ナショナルトラスト運動の発祥の地でもあります。そういうことで海岸を今も守って、天神崎に沈む夕陽というのは、私は市長室から毎日観ているんですが、こんな贅沢なことはないなあと思うんですが、そういうところも精神として我々の地域には脈々と続いています。

今言いましたように、古の熊野地、これは当時の都人が本当に蘇りを求めて熊野に毎日毎日ものすごく詣でた。その後も一般の方々にも浸透して、蟻の熊野詣でと称されるほど、多くの皆さんが熊野に訪れました。それはやはり再生の地であり蘇りの地であった。これは当時はそうだった。これは草柳泰三氏によれば汚れを落とすにきたんだとこのように表現されております。この汚れというのは何も汚い物を洗いにきたのではなくて、気が枯れることを汚れという。要するに気が枯れて、荒んでいろんなことで壁にぶち当たっていくと。これを落とすに行く。これが熊野地だった訳です。そいて元々黄泉の国。要はずっと昔からいいますと、古事記の世界まで遡りますと、伊弉冉（いざなみ）が葬られたのが熊野ですから、そういう黄泉の国、死後の世界、そこへ行って帰ってくる。これで黄泉へ行って帰ってきますから蘇りの地ということで。現代社会におきますと、いろんなストレスだとかいろんなそれこそ汚れといいますが、そういう意味での精神的な課題というのが今のストレス社会にはある

と思います。それを是非熊野に来ていただいて、その自然の山林の中で、十分それを再生していただいて、小栗判官・照手姫という有名な伝説があるのですが、この小栗は本宮の湯の峰のつぼ湯で再生をされて帰る訳です。この物語なんかも元々蘇っていく再生の地とこういうふうな地域です。古くからそういう地で、そしてしかも熊楠翁やナショナルトラスト運動に代表されるように、やはり自然というものと共生して行こう。そしてそういう精神的なものがある意味日本のルーツになっている部分であろうと我々は自負をしております。

経済的なカウントからすれば大変厳しい地域ではございますが、私もこれからの街づくりの中で、勿論経済的な振興策というのは大事ですが、一方で心の豊かさというものが求められております。モノの豊かさがこのように一定のレベルに達した時に、今みんな振り返って考えるのは何か置き忘れてきたものがあるんでないかなあ。そのことが植林にそのまま通じるかどうかは別としまして、先ほど言いましたように、山に木を植えてきた文化というものが世界で文化的な景観として認められた地ということで、そういう深い意味合いを今日は皆さん方に少しでもお伝えができたらなあ、そういう想いで寄せていただきました。少し理屈っぽい話になりましたけれども、いずれにいたしましても、うちには先ほど仁坂知事さんからもありましたように、龍神温泉という日本三美人湯がございます。

それから日本最古の温泉と言われた湯の峰温泉がございます。それから川が湯になって流れています川湯温泉もございます。その他小さな温泉幾つもございます。山に木を植えたお疲れは温泉で十分癒していただいて、できれば民宿、いろんな宿泊施設にお泊まりをいただきまして、経済効果と先ほど言いましたが、少し地元にもお金を落としていただけたらなあお一層有り難いなとこのように思っているところです。

我々といたしましては、先ほども申し上げましたように、直接皆様方をお迎えをする、お世話をする森林組合も当然ですが、地元あげて、所謂ホスピタリティと言いますか、おもてなしの気持ちを持ちながら、そしてみなさん方が木を植えて帰られる時には、良かったな、日頃のストレスが少しでも癒されたなあ。そういうふうな「企業の森」になっていただければなあお一層意味があることではないのかなとこのように思っているところでございます。

いずれにいたしましても、今言いましたように、これを機会に詳しいことということでございましたら、また県を通じてお声かけをいただきましたら、十分またご説明を申し上げたいというふうに思います。

少し持ち時間早いですけれども、私からの話というのはこれで十分伝えられたかなと思いますので、今日のご挨拶方々皆様方へのお願いということに代えさせていただきます。 どうもご清聴ありがとうございました。

## ■ 吉川室長

皆さん、こんにちは。只今、ご紹介に預かりました松下電工 CSR・社会貢献室の吉川でございます。日頃は弊社をご愛顧賜りまして、厚く御礼申し上げます。また、本日このような機会を与えて頂きまして感謝申し上げます。最初にお断り申し上げますが、「企業の森」への参画に関して弊社は取り組み始めたばかりで、まだよく分っていない点が多々ありますこと、予めご容赦頂きます様お願い致します。

本日は、松下電工の概要、社会貢献に関する基本的な考え、その後 本題であります「ながきの森」について活動の背景、取り組み内容、社内での反応などについてお話させていただきます。

松下電工の概要でございます。1918年創業で来年90周年を迎えます。売上高は連結で約1兆6700億円、従業員は連結で約5万人です。松下電工は実は大変幅広い事業をおこなっています。照明、情報機器、電器（家電）、住設建材、電子材料、制御機器の6つの事業で商品アイテムは30万を超えています。売上比率はグラフの通りです。

松下電工の「社会貢献に関する基本的な考え方」ですが、松下幸之助創業者の「利益は社会に還元する」の理念に則り、「良き企業市民」として松下電工グループ全体として社会貢献に取組み「より良き社会」の実現をめざすことをありたい姿とし、このような活動に取り組んでおります。

ひとくちに社会貢献と言っても大変幅広いものであります。私共では、緑の恩返し、教育・人づくり、災害復興支援・文化芸術支援の3本柱で重点的に推進しております。

○緑の恩返し

国内では富士山植林やびわ湖のヨシ刈りなどNPOの活動に参加しております。海外では、2001年から木質材料の調達先である東南アジア各国等で「緑の恩返し」として植林活動をしております。

#### ○教育・人づくり（社内インフラ活用）

社内のインフラを活用した社会貢献活動で学生にモノづくりの技術・技能を伝承する「松下電工・大阪府立工業高等学校長会産学連携事業」を展開。大阪府下の工業高校の生徒を対象にしたインターンシップ受入れ等をおこなっています。

#### ○災害復興支援・文化芸術支援

災害復興支援は災害時の支援を、文化芸術支援は東京本社ビル内にある「汐留ミュージアム」や48年の歴史をもつ弊社の「吹奏楽団」、「アメリカンフットボール」の支援などがあります。

それでは、「ながきの森」の取組みについてお話させていただきます。目的として、植林ボランティア活動を通じた良き企業市民づくりと共に森林を身近に感じ、地球環境との共生意識を高め、そして地元の皆様との相互理解を深めた豊かな感性をもった心を育てる「人づくり」にも繋がる活動と考えております。

弊社は、新しい社会貢献として「緑」に関する企画を検討している中、「企業の森」事業を先進的に進めておられる和歌山県よりお話を頂きました。植林をすると言ってもスキルもノウハウもない私達ですから しっかりとしたサポート体制は必須です。種々お話を伺って、これらサポート体制もしっかりしておられ、大変熱意をもって接して頂いたこと、創業者の生誕の地であることも含め、和歌山県が推進する「企業の森」事業に賛同した次第です。

いくつか候補地を検討させて頂いた結果、龍神村で初めての企画、広大な土地、雄大な景観、世界遺産「熊野古道」に近いなどで龍神村に決定させて頂きました。

規模は10年間で20ha 広葉樹を中心に45000本（毎年2ha づつ）植林していく計画です。

「企業の森」に参画することを社内いかに浸透させるかは重要です。社内情報入手ソースとして社内報（社内新聞）はトップでありこれを積極的に活用することに致しました。

2006年5月に「松下電工が森作りをします」の案内と同時にネーミング募集をかけました。結果、国内外から411件の応募がありました。緑豊かな森が「長生き」してほしいとの思いが込められた「ながきの森」を採用しました。命名者は社員の子（当時小学2年生）でした。

植樹の日を翌2007年4月7日に決定し、11月より具体的準備作業に入りました。当社にとって初めてのことであり、推進組織体制をつくり、企画、募集、新入社員研修、看板製作、運営の担当で準備を進めて参りました。

参加者数は社員（家族、OB含む）150名、新入社員150名の総計300名と設定しました。大人数の植樹でもあり、事前に数回の現地調査、確認など慎重に進めました。

社員対象の植林ボランティア募集も社内報を活用しました。定員150名を上回る応募があり抽選で絞込みました。その中で、ボランティアスタッフも同時募集し16名が手を挙げてくれました。ボランティアスタッフは事務局と一緒に参加者のお世話をする役割です。

植樹当日のスケジュールです。前半は植樹式典、チェーンソーカービング紹介、後半は植樹作業でご覧の内容で進めました。植樹終了後、折角ですから希望者は日本三美人の湯「龍神温泉」に入浴後バスで帰って頂くことにしました。

植樹式典の会場レイアウトです。式典の簡易ステージ（斜面で足場が悪いため）、チェーンソーカービング場、救護・資材置き場のテント、仮設トイレなどを設置しています。

植樹式典の様子は、式典直前より雨となりました。仁坂知事、真砂市長にご挨拶頂きました。我々は雨で残念と思いましたが、龍神村では「龍の神様が歓迎するとき雨が降る」との言い伝えもあるそうで、また苗木にとっても恵みの雨で根付きがすこぶるいいそうです。記念植樹では、松下電工の名にちなみ「クロマツ」と龍神村を象徴する木として「スギ」が植えられました。

ご覧頂きますように全員雨具着用の作業となりました。総勢300名が、ケヤキ、コナラ、ヤマザクラ、イロハモミジ、ヒノキを植樹しました。

龍神村在住のチェーンソーカービング世界チャンピオン城所様の素晴らしいパフォーマンスを披露して頂きました。今年の干支である「猪」を彫って頂きました。この「猪」は「ながきの森」の看板の横に事前に製作頂いた「猿」と一緒に鎮座しております。「猪」年に始まって10年目「猿」年までの植林活動期間を表しています。

昼食のお弁当はNPO法人「龍神ハート」の皆さんにつくって頂きました。黒米やあまごの甘露煮など全てが龍神村産の食材にこだわり、弁当箱も龍神の間伐材を使うなど龍神らしさ満載の美味しいお弁当でした。

今回の植林ボランティアは新入社員研修にも組入れました。新入社員は前日の金曜日、龍神村に入り、弊社のCSR（企業の社会的責任）や環境取組み講義のあと、森林組合の方より間伐についてのご説明頂きました。その後、実際に山に入り間伐体験も致しました。その日は龍神に宿泊し、翌日植林ボランティアとして社員達と合流しました。

「ながきの森」植樹参加者のアンケート結果です。新入社員を除いて、30～50代で7割を占めています。当日、雨模様にも関わらず概ね好評であり、今後も参加したいが85%を占めました。

アンケートでよかったこととして「植林、社会貢献に参加できたこと」「環境保全に役立てたこと」「環境について考えることができた」「自然とふれあうことができた」などがあげられていました。一方、「往復のバス乗車時間に対して植林の時間が短すぎた」「一泊して地元の方との交流しなかった」などの意見もあり次回以降の参考にしたいと思っています。

社内報では、植樹式典の様子を2回連続で掲載しました。社内報モニター調査で、参加者の生き生きした様子が伝わってきた、笑顔が多くて楽しそうな雰囲気を感じた、が大半を占め「ながきの森」の社内認知度も高まりました。

「ながきの森」年間活動計画ですが基本的に4月植樹、8月頃に下草刈りなど、11月翔龍祭へのご協力、12月弊社のイベントへのご参加などを中心に展開して参ります。

今年より翔龍祭でのご協力、弊社ファミリー・カルチャー・フェスティバルへご参加頂き、地域交流を進めて参ります。

写真は9月に撮影したものです。苗木もしっかり根付き緑一杯の斜面になっています。

「ながきの森」植樹式典を中心に編集したDVDをお持ちしましたのでこの後ご覧頂きたいと思います。

最後になりましたが、弊社の「CSR報告書」と毎年開催しております「地球環境展」のご案内状をお持ち致しました。地球環境展は大阪と東京で開催しておりますが大阪は実は今週の木曜金曜日です。ご多用の折と存じますがお越し頂ければ幸甚でございます。

～DVD放映～

松下電工は、社会貢献の一環として、和歌山県田辺市龍神村で「企業の森『ながきの森』」の植林をスタートしました。

古来より木の国と呼ばれた和歌山県は、創業者松下幸之助の出身地でもあります。和歌山県では、紀伊山地の霊場と参詣道が世界遺産に登録されたのを機に、環境林の保全と世界遺産の森の保全という趣旨に賛同する人達と共に森林整備をしようと「企業の森」を提唱しています。

松下電工ではこの提唱に賛同し、この度和歌山県田辺市龍神村で植林を開始しました。

「ながきの森」は……………（以下、省略）

以上でございます。この映像は我々の記録用として作成したものです。

これでお話を終わらせて頂きます。ご清聴有難うございました。